

周辺のみどころ

ハスの群生の西に隣接して、水生植物を中心とした植物公園がある。ハスの群生の鑑賞と観察には絶好の施設である。ハス、スイレンを意味する「ロータス」名を冠したアナトリウムでは、一年中美しいスイレンの花が咲き誇る。

また、3月から4月にかけては、「サラノキ」の花が咲くことでも知られる。これは平家物語に「…沙羅双樹の花の色…」と謡われた、釈迦涅槃の樹であり、仏教三聖樹の一つに数えられる。まさに、清き水の世界である琵琶湖を象徴する施設である。



水生植物公園みずの森のアプローチ



【アクセス】

- JR琵琶湖線草津駅からバスで水生植物公園みずの森下車。  
夏季には浜大津港から船でもアクセス可。

【もっと詳しく知りたいひとへの案内】  
(関連文献/関連施設)

- 草津市立水生植物公園みずの森  
Tel. 077-568-2332

# 烏丸半島のハスの群生

草津市下物町



ハスの群生と三上山

烏丸半島の東に広がる、国内有数のハスの群生地。その起源は明確ではないが、伝教大師最澄が志那の蓮海寺や芦浦の観音寺に植えた蓮がここに流れ着いたのが始まりという人もいる。

仏の座す聖なる花である蓮が、最澄が開いた比叡山を西に仰ぐこの地に群生したことは、「天台薬師の池」と謡われた琵琶湖の彩りとして誠に相応しい。





湖面を埋める蓮花

## 烏丸半島のハスの群生

所在地 草津市下物町

### 群生の由来

この蓮の群生は、昭和30年代頃から徐々に増え始め、現在では、生育面積が13ha以上にもおよぶ、国内でも最大級のハスの群生地となっている。

群生している蓮は、「<sup>はなぼす</sup>花蓮」と呼ばれる観賞用の蓮で、レンコンは細く食用には適さないが、花付きが良く、花が大きく育つ。このことは、まず、この群生地のハスが、レンコン栽培が起源ではないことを示している。また、観賞用の栽培種の系統のハスであることから、もともと、ここに自生していたハスが増えたものでもなさそうである。結局の所、その起源由来は良くわからないが、興味深い「話し」がある。

それは、この群生地の南にある、草津市志那の蓮海寺のハスカ、この群生地に注ぐ境川の上流にある<sup>あしうらかんのんじ</sup>芦浦観音寺のハスがここに流れ着き、増えたというものである。さらに、この両寺の蓮花の起源には、比叡山延暦寺をひ

らいた伝教大師最澄が深く関わったという伝承がある。すなわち、最澄が琵琶湖を望み「其景概ヲ賞シ、遂ニ湖ニ航シ志那ニ来テ蓮ヲ植エ、自ラ地藏ヲ作り一寺ヲ建立シテ安置シ、蓮海寺ト号ス。」という。室町時代以降、蓮海寺は、近江随一の蓮花の景勝地として都にまで知れ渡り、多くの文人墨客が訪れたという。また、芦浦観音寺の堀にもハスが群生していたことから、最澄が蓮海寺に蓮を植えたとき、琵琶湖との関係が深い芦浦観音寺の堀にも蓮を植えたのでは、と。何れにしても、平安時代の歌謡集である<sup>りょうじんひしやう</sup>梁塵必抄に「天台薬師の池」と謡われた琵琶湖に、最澄が植えたハスの<sup>まじつゑい</sup>末裔が群生しているという「話し」は、事実はどうあれ、「水の浄土琵琶湖」の歩みに華やかな彩りを添えている。

### 環境を映す蓮花

湖面に美しく咲き誇る蓮花。ハスが群生するためには必須の要件がある。それは湖底の



ハスの群生越しに比叡山



蓮花



志那の蓮海寺

養分である。これが減ると、ハスの成長が阻害され、増えることができない。また、一定の水位が維持されることも必要である。これらのことは、現在の琵琶湖の姿を暗示している。昭和30年代から増え始めたというこのハスは、琵琶湖の水位の人為的な管理と、湖底の堆積土壌の富栄養を示しているからである。このハスの群生は、豊かな自然の創造ではなく、実は、自然からの現代に対する警鐘なの

かもしれない。

さりとて、この群生は美しく、近江の夏を代表する景観になっている。湖底の栄養が減じ、ハスの群生が衰退しかけた時、これを琵琶湖の「宝」として愛でるため、人が穏やかに手を貸し、適当な範囲の群生を維持する。このような時が来たとき、この群生は琵琶湖の蓮華台に昇華するのかもしれない。